最優秀賞小学生の部

集まれ感謝の心、繋がれ地域の輪

日高市立高根小学校　六年
水井　林檎

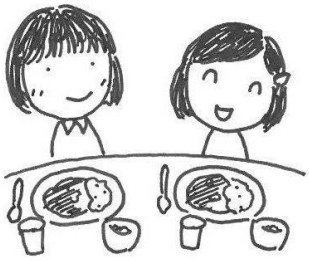
小学校の目の前、商店街の一角に「たかねサロン」はある。地域のつながりを深めていくことを目標に日々様々な活動が行われている。ぬくもりげんき食堂も、その活動の内の一つだ。月に一回程度、地域のお年寄りやボランティアの方々が集まり、食堂を開いてくれる。私や妹はこのたかねサロンの常連だ。「水井三姉妹が来ないと始まらないよ。」と、常に優しく温かく私たちを迎えてくれる。

サロンの中にはホワイトボードが置かれており、そこにはいつも子どもたちの感謝のメッセージが並んでいる。いつ来てもそれは同じで、逆を言えば変わり映えもしない。なのにおばちゃんもおじちゃんも、毎回喜んでくれる。初めて見たかのように喜んでくれるのだ。

ある時私はふと思い立って、ホワイトボードにその日ぬくもりげんき食堂に来ていた全ての子どもたちの似顔絵と名前を書いた。その下に「げんき食堂ありがとう。」と大きく書いた。

「こんなに素敵な絵をありがとう。」「嬉しいわ、涙が出ちゃうわ。」お迎えの保護者の方たちにも「見て帰って、こんなの書いてもらったの。」と、責任者のおばちゃんは本当に嬉しそうに私の不出来な絵を皆に見せてくれていた。いつもおいしいご飯をありがとう。楽しい時間を、優しさを、本当にありがとう。私の心は「ありがとう」でいっぱいだった。

げんき食堂では食事の時間になると、進んで食事を運ぶ子や食器を用意する子がいる。受け取った子は「ありがとう」と言う。おばちゃんたちは「お手伝いありがとう。」と言う。感謝の心が途切れることなく続くこの場所は、私にとってとても居心地が良い。失いたくない大切な場所。感謝の心が集まり、地域の輪が繋がっていく場所。ホワイトボードに次に描きたいものは決まってる。大好きなおばちゃんやおじちゃんの顔、それと大きな「ありがとう」だ。



最優秀賞中学生の部

「職場体験を通して感じたこと」

日高市立高萩中学校　二年
柳沢　七菜

私は将来、学校の先生となって、たくさんの人に手助けができるような大人になりたいと考えています。そこで、学校の授業の一環として活動する職場体験では、母校である日高市立高萩小学校に行かせていただけることになり、先生として二日間、活動をしました。この二日間の体験を通して学んだことが二つあります。

一つ目は、仕事の大変さです。私はたったの二日しか、しかも体験でしたけれども、とても疲れました。特に、簡単そうに見える丸つけの仕事が一番難しかったです。一人ずつ、課題が終わった子を見つけ、丸つけをしていくのですが、どうしても片寄ってしまい、均等に回って丸つけをすることがあまりできませんでした。また、一日中立っていることも大変で、仕事とは、私が想像していたものよりもはるかに厳しいものだと実感しました。

二つ目は、いつもとは違った視点でものごとを見ることは、とても重要だということです。そして、視点を変えることで今までの自分に気付き、これからはもっとこう直したほうがいいと、自分のことを見つめ直せると思いました。

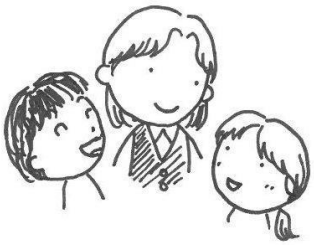
今の私は生徒として毎日を過ごしていますが、二日間だけ先生として活動させていただけたことで、私のできるかぎりで先生のことを手伝ってあげたいと思うようになりました。その一つは、忘れ物をしないことです。今回の体験を通して、忘れ物をした人がいると先生は、その授業中ずっと、忘れ物をした人のことを気になってしまうことに気付きました。言い方をかえると、忘れた人に貸してあげる優しい人や、もって来なかったから進まないことに対して心配をするということです。

このことは、「大変だと思うことはなんですか。」と質問した時に、先生が言っていました。これを聞いて、私は納得しました。そして、先生や友人を困らせないためにも忘れ物は絶対にしないようにしようと、心に決めました。また、忘れ物をしないことも、先生を助ける方法の一つだと思います。

私は職場体験を通して、私たちが毎日笑顔でいることが、それが先生を支える第一歩だと感じました。私は学校そのものが、支え合いの場所だと思います。

私は今回、学んだことや感じたことをこれからの生活に活

かしていくためにも、誰かを支えられる心を成長させていきたいです。そして、たくさんの大切なことを教えていただいた、母校の先生方に、私はとても感謝しています。たった二日間の体験でしたが、されど、二日間と言いたくなるような、私を成長させてくれたとても有意義な時間を糧として私の将来に活かしていきたいと思います。



特別賞

ぼくのありがとう

日高市立高麗川小学校　五年
中村　誓志

ぼくのこれまでの十一年間は家族や周りの人たちに支えられて、ここまで大きくなることができたと思います。ぼくの十一年間の中で、最大の出来事は、去年の手術・入院です。二回の入院で四年生の二学期のほとんどを欠席しました。入院中に時々、家に帰りたいな、学校のみんなに会いたいなと思いました。学校の先生や友達からもらったつるや手紙にとてもはげまされました。家族ともあまり会えませんでしたが、病院では新しい出会いがありました。同じ部屋の男の子たちとすぐに仲良くなりました。先に手術を受けた子たちには、「痛みはすぐおさまるよ。」や「納豆を食べると治りが早いらしいよ。」と教えてもらい少し安心できました。その後の入院生活は、インドや中国、日本全国から来て同じ手術を受けた同年代の子たちとゲームをしたり、いろいろな話をして、すごしました。入院のさびしさも少しまぎれました。

長い入院生活からふだんの生活に戻れた時は、本当にうれしかったです。当たり前に学校へ行けること、家で家族みんなで食事をしたり、自由に遊べる喜びを感じました。家族とすごす時間、友達と一緒に勉強したり、運動できる事が改めて特別なものに感じられました。

この経験を通して周りの人たちに支えられ助けられているということ、その人たちに感謝することの大切さを知りました。だからいつでも感謝を忘れず、「ありがとう」と言えるぼくでありたいです。